Journal of Culture and Information Science, 12(2), 1-12,（March 2017）

資料紹介

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集

―翻字と解題（6）―

福田　智子・三井　義勝・村田　冴子・李　心媛

同志社大学文化情報学部蔵無名歌集（仮称『いろは和歌集』）は、和歌を句頭の文字によって、いろは順に分類･配列した歌集である。本稿では､歌頭が「し」「ひ」「も」「せ」「す」の歌､および「せ」と「す」の歌群の間に存する 1 首の計 128 首について､『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検した。その結果､『古今集』『新古今集』といった勅撰集や、『拾遺愚草』『壬二集』などの六家集を重視する、前稿までと同様の撰歌態度が窺えた。ただし、本書が、『新編国歌大観』所収『拾玉集』の欠落歌や、『源氏物語』の梗概書『山頂湖面抄』の歌を載せるなど、『新編国歌大観』内に収まらない撰歌範囲の広がりをもつことを認識すべきである。

1. はじめに

本稿は、福田智子・児玉駿介・加藤みどり「資料紹介　同志社大学文化情報学部蔵無名歌集―翻字と解題（１）―」(『文化情報学』第 9 巻第 1 号、2013 年 10 月)、同「資料紹介　同志社大学文化情報学部蔵無名歌集―翻字と解題（２）―」(『文化情報学』第 9 巻第 2 号､2014 年 3 月)､福田智子･久野由香子・村田冴子「資料紹介　同志社大学文化情報学部蔵無名歌集―翻字と解題（３）―」(『文化情報学』第 10 巻第 1、2 号、2015 年 3 月)、福田智子・穂満建等「資料紹介　同志社大学文化情報学部蔵無名歌集―翻字と解題（４）―」(『文化情報学』第 11 巻第 1 号､2015 年 11 月)､福田智子･三井義勝・村田冴子・李心媛「資料紹介　同志社大学文化情報学部蔵無名歌集―翻字と解題（５）―」(『文化情報学』第 12 巻第 1 号､2016 年 10 月）の続編であり、本稿で一通りの考察を終えることになる。

これまで､歌頭が「い」から「み」までの歌（「ろ」「へ」「り」「る」「ら」「ゐ」の歌はない。また、「お」の歌は「を」の箇所に掲出。)、計 831 首について、『新編国歌大観』を対象に他出歌集を検したが、本稿では引き続き､「し」「ひ」「も」「せ」「す」､および「せ」と「す」の歌群の間に存する 1 首の計 128 首（「し」「ひ」「も」「す」は各 30 首。「せ」は 7 首。「ゑ」の歌はない。八十四丁裏から九十七丁表にあたる。）について、同様の翻字と考察をおこなう。

2. 翻字

【凡例】

①和歌本文の歌頭には、（1：い 1）というように、歌集全体の通し番号と、歌頭の文字ごとの通し番号を付す。

②本文の表記は、できるかぎり原態を生かして、通行の字体に翻字するよう努めた。歴史的仮名遣いに統一したり、私に濁点を付したりすることは避けた。

③和歌の頭注と脚注の位置に記される集付と作者名は、和歌本文の後に、（頭注 / 脚注）の順で示す。なお、どちらか片方しか記されない場合は、記述のないことを示す記号として「―」を用いる。

④他出歌集の調査範囲は､『新編国歌大観』に拠り、巻数 - 通し番号を付した歌集名の略称と歌番号を示す。

〈例〉3-19 貫之 355『新編国歌大観』第三巻 19 番目の『貫之集』355 番歌

⑤本書と他出との間に、本文異同（表記の異同は除く）のある場合は、▽を付して異同を句ごとに挙げ、歌集名と歌番号を示す。

⑥本書の和歌本文に見セ消チ・挿入記号・傍書などの書き入れがあった場合は、〔本文注記〕の項目を設け、説明を加える。なお、傍書が見セ消チや挿入記号とともに記されている場合は、書き入れ修正後の本文を掲げる。

【翻字】

（832：し 1）白妙の 袖の別に 露おちて 身にしむ色の 秋風そふく（新古今 / 定家）
1-8 新古今 1336、3-133 拾遺愚 2550、5-194 水無瀬 149、5-195 若宮建 28、5-196 桜宮合 28、5-216 定家合 158、5-335 井蛙 173、8-34 雲玉 381、10-177 定家八 1067

（833：し 2）霜さやく 野邊の草葉に あらね共 なとか人めの かれまさるらん（新古今 / 延喜）
1-8 新古今 1244、7-4 延喜御 3、10-177 定家八 1140

（834：し 3）しらせはや しほやく浦の けふりたに おもはぬ方に なひくならひを
▽［思はぬ風に］5-367 太平記 73

（835：し 4）しら波の 跡なき方に 行舟も 風そたよりの しるへなりける（古今 / 藤原勝臣）
1-1 古今 472、2-4 古六帖 1827、5-294 奥儀 493、5-296 和歌初 110、10-177 定家八 838、10-206 歌林良 218、▽［しるべなりけり］6-3 継色紙 14

（836：し 5）しきたえの 枕の下に 海はあれと 人を見るめは おひすそありける（古今 / 友則）
1-1 古今 595、6-4 如意宝 33、9-5 逍遊 2560、▽［まくらのしたは］［うみなれど］3-11 友則 46

（837：し 6）しらさりき 雲ゐのよそに みし月の影をたもとに やとすへしとは（千載 / 西行 イ圓位法師）
1-7 千載 875、3-125 山家 617、3-126 西行家 315、5-172 御裳濯 56、10-177 定家八 1367、▽［見る月の］5-386 西行文 115

（838：し 7）しほ〳〵と まつそなかるゝ かりそめの みるめはあまの すさみなれとも
5-421 源氏 231、5-249 物語合 277、5-444 無名草 18

（839：し 8）しるといへは 枕たにせて ねし物を ちりならぬ名の 空にたつらん（古今 / 伊勢）
1-1 古今 676、2-4 古六帖 802、3-15 伊勢集 154、10-196 色葉和 819

（840：し 9）白玉か 何そと人の とひし時 露とこたへて きえなまし物を（伊勢物語 古今にも / 業平）
5-415 伊勢語 7、1-8 新古今 851、5-299 袖中抄 192、5-376 宝物 405、10-212 源氏注 925、10-212 源氏注 993、▽［とひしより］2-3 新撰和 360

（841：し 10）しほかまに いつかきにけん あさなきに つりするふねは 爰によらなん（同 / 同）
5-415 伊勢語 144、3-6 業平 41、1-16 続後拾 975、5-299 袖中抄 338、6-10 秋風集 1149、▽［あさなけに］7-2 業平 65

（842：し 11）忍ふ山 しのひてかよふ みちもかな 人のこゝろの おくもみるへく（同 / 同）
1-9 新勅撰 942、5-320 竹園抄 42、5-415 伊勢語 23、10-181 歌枕名 6932、▽［しのびにこえん］2-4 古六帖 866

（843：し 12）しるしらぬ 何かあやなく わきていわん おもひのみこそ しるへなりけれ（同 / 染との）
1-1 古今 477、2-4 古六帖 2541、3-6 業平 24、5-291 俊頼髄 196、5-302 歌色葉 73、5-383 十訓 26、5-415 伊勢語 175、10-177 定家八 844、10-206 歌林良 228、▽［しるしらず］5-374 今昔 87、7-2 業平 72、▽［しりしらぬ］5-293 童蒙 360

（844：し 13）白露に 風のふきしく 秋の野は つらぬきとめぬ 玉そちりける（百人一首 / 文屋朝秀）
1-2 後撰 308、2-2 新撰万 87、5-4 寛平后 90、5-275 百人秀 38、5-307 近代秀 43、5-308 詠歌大 35、5-335 井蛙 185、10-177 定家八 360、10-178 八代秀 12、10-209 僻案抄 30、▽［しら露を］5-276 百人首 37

（845：し 14）しのふれと 色に出にけり わか恋は 物やおもふと 人のとふまて（同 / 平兼盛）
1-3 拾遺集 622、1-3' 拾遺抄 229、2-8 新撰朗 737、3-32 兼盛 102、5-28 天徳合 41、5-166 俊成合 105、5-275 百人秀 41、5-276 百人首 40、5-293 童蒙 874、5-294 奥儀 138、5-295 袋草紙 65、5-301 古来風 375、5-314 詠歌一 20、5-328 三五記 200、5-361 平家覚 49、5-363 盛衰記 132、10-177 定家八 884、5-223 時代不 197、5-291 俊頼髄 178、5-295 袋草紙 310、5-362 平家延 117、▽［つつめども］5-388 沙石 64、▽［みる人ぞとふ］5-291 俊頼髄 177

（846：し 15）下もえに おもひきえなん けふりたに あとなき雲の はてそかなしき（新古今 / 俊成）
1-8 新古今 1081、4-19 俊成女 201、4-42 仙五十 243、5-235 新時代 125、5-273 続歌仙 106、5-277 定十体 25、5-278 自讃歌 79、5-328 三五記 7、5-346 兼載談 101、6-31 題林愚 7430、10-177 定家八 971

（847：し 16）しのはしよ われふりすてゝ 行春の 名残やすらふ 雨のゆふくれ（拾遺愚抄 / 定家）
3-133 拾遺愚 920、4-31 正治初 1323

（848：し 17）白玉か 露かととわん 人もかな ものおもふ袖を さしもこたえん（新古今 / 元真）
〔本文注記〕第二句「露かととわん」の「露かと」の右に「何そもイ」あり。結句「さしもこたえん」の「もこた」の右に「イてこふらん」あり。
▽［さしてこたへむ］1-8 新古今 1112、3-28 元真 330

（849：し 18）しのゝめに をしみし袖の 色も香も 軒はにかへる 宿の梅かえ（壬二抄 / 家隆）
▽［軒端にうつる］3-132 壬二 2023

（850：し 19）忍ふるに こゝろのひまは なけれ共 猶もるものは 涙なりけり（新古今 / 入道前関白太政大臣）
1-8 新古今 1037、5-223 時代不 82、6-31 題林愚 6232、10-177 定家八 871

（851：し 20）しつのおか あさのころもの 袖までも 夏来にけりと おもひかほなる（拾玉抄 / 慈圓）
3-131 拾玉 822

（852：し 21）忍ひつま おきゆく空に ほとゝきす 名残おほくも 鳴わたるかな（長秋抄 / 俊成）
3-129 長秋 231、4-29 為忠後 193、6-31 題林愚 2098、▽［おき行く空の］［聞渡るかな］2-10 続詞花 127

（853：し 22）しめをきて いまやとおもふ 秋山の よもきかもとに 松虫のなく（新古今 / 俊成）
〔本文注記〕第三句「秋の山の」の二文字目「の」見セ消チ。
1-8 新古今 1560、5-197 千五百 1361、5-343 正徹語 66、▽［いまはとおもふ］5-277 定十体 218、5-278 自讃歌 63、5-326 愚見抄 4、5-329 桐火桶 176、5-345 心敬私 35

（854：し 23）鹿のなく 秋の山もと 露もろし 松風をろす 庭のこはきに
3-131 拾玉 4743

（855：し 24）しら雲に たえ〳〵ましり 行月の 末ふきはらふ 夜半の秋かせ（壬二抄 / 家隆）
▽［白雲の］［末吹きはらへ］3-132 壬二 2453

（856：し 25）時雨くる と山の雲は はれにけり 夕日にそむる 峯の紅葉は（月清抄 / 後京極）
▽［しぐれつる］1-17 風雅 684、3-130 月清 436

（857：し 26）しの原や 霧にまかひて なく鹿の 聲かすかなる 秋のゆふ暮（山家抄 / 西行）
3-125 山家 438、▽［きりにまどひて］3-126 西行家 255

（858：し 27）白露の たのめかをきし 人はこて 霧のまかひに 松むしの聲（月清抄 / 後京極）
▽［きりのまがきに］3-130 月清 922、5-184 老若合 230

（859：し 28）しら雲も ひとつにきえて むさし野の 雪よりをちは 山のはもなし（壬二抄 / 家隆）
▽［ひとつにさえて］3-130 月清 1278、▽［しら雲と］［ひとつにさえて］［雪より後は］6-27 六華集 1267

（860：し 29）霜さゆる 庭の木の葉を ふみ分て 月はみるやと とふ人もかな（山家抄 千載にも / 西行）

1-7 千 載 1009、3-125 山 家 521、3-126 西 行 家 283、5-172 御裳濯 43、5-248 和一字 227、5-335 井蛙 41、6-31 題林愚 5411、10-177 定家八 1712

（861：し 30）しろたえの 袖のうらなみ よる〳〵は もろこし舟も こき別るらん（拾遺愚抄 / 定家）
▽［もろこしぶねや］2-15 万代 2309、3-133 拾遺愚 2598、▽［もろこしぶねや］［こぎわたるらん］2-16 夫木 11487、5-221 光明峰 179

（862：ひ 1）人しれす 我恋しなは あちきなく いつれの神に なき名おほせん（伊勢物語 / 業平）
〔本文注記〕八十七丁裏 1 行目に下句、10 行目（最終行）に上句が記される。それぞれの行末に「●」印あり。
5-415 伊勢語 163、1-21 新続古 1157

（863：ひ 2）人しれす 物をもふ比の わか袖は 秋の草葉に おとらさりけり（—/ 貞数親王）
1-2 後撰 901、10-177 定家八 1005、▽［ものおもふほどの］2-4 古六帖 2672

（864：ひ 3）人しれぬ おもひのみこそ はひしけれ 我かなけきをは われのみそしる（古今 / つら之）
1-1 古今 606、2-3 新撰和 266、▽［我のみぞきく］3-19 貫之 555

（865：ひ 4）人しれす いまや〳〵と ちわやふる神さふるまて 君をこそまて（新古今 /—）
1-8 新古今 1858、2-10 続詞花 380

（866：ひ 5）人めなく あれたる宿は たち花の 花こそ軒の つまとなりけれ
5-421 源氏 169

（867：ひ 6）人はいさ おもひやすらん 玉かつら おもかけにのみ いとゝ見えつゝ（伊勢物語 / 業平）
5-415 伊勢語 38、1-9 新勅撰 950、10-212 源氏注 1403、▽［今はとて］［わすれやすらん］5-369 曾我仮 8

（868：ひ 7）一とせに ひとたひきます 君までは 宿かす人も あらしとそおもふ（同 /—）
5-415 伊 勢 語 148、1-1 古 今 419、2-4 古 六 帖 1198、3-6 業平 46、5-374 今昔 89、7-2 業平 48

（869：ひ 8）人はいさ 心もしらす ふる里は 花そむかしの 香ににほひける（古今 / 貫之）
1-1 古今 42、5-275 百人秀 28、5-276 百人首 35、5-308 詠歌大 5、5-363 盛衰記 66、10-177 定家八 53、▽［故郷の］3-19 貫之 814、▽［ふるさとの］［花ぞ昔に］［かはらざりける］5-362 平家延 58

（870：ひ 9）ひこほしに 恋はまさりぬ あまの川へたつるせきを 今はやめてよ（伊勢物語 / 業平）
5-415 伊勢語 170、5-383 十訓 189、10-212 源氏注 964、10-212 源氏注 1098、▽［□こぽしに］［□□のがは］［いまはやめてし］10-132 陀羅歌 46

（871：ひ 10）人もをし 人もうらめし あちきなく 世をおもふ故に 物おもふ身は（百人一首 / 後鳥羽ゐん）
5-276 百 人 首 99、1-10 続 後 撰 1202、2-15 万 代 3583、4-18 後鳥羽 1472

（872：ひ 11）人しれす くるしきものは しのふ山下はふくつの うらみなりけり（新古今 / 清輔）
1-8 新古今 1093、3-115 清輔 255、5-272 中古六 106、10-181 歌枕名 6928

（873：ひ 12）久かたの 光のとけき 春の日に しつこゝろなく 花のちるらん（古今 / 友則）
1-1 古 今 84、3-11 友 則 6、5-274 秀 歌 大 24、5-275 百人秀 26、5-276 百人首 33、5-292 綺語抄 4、5-307 近代秀 34、5-308 詠歌大 15、10-177 定家八 151、10-212 源氏注 977、▽［光さやけき］2-4 古六帖 4033、2-4 古六帖 4196

（874：ひ 13）人かけも せぬものゆへに よふことり なにとかゝみの 山になくらん
4-26 堀河百 217、2-16 夫木 1823、▽［せぬものからに］10-181 歌枕名 6211

（875：ひ 14）ひさかたの あまのかく山 ほとゝきす 玉ゆらきなけ 雲のまに〳〵
▽［天のかご山の］4-26 堀河百 377、▽［あまかぐ山の］10-196 色葉和 398、▽［あまびこ山の］10-181 歌枕名 2922

（876：ひ 15）ひとりねの わひしきまゝに おきゐ

つゝ 月をあはれと いみそかねつる（—/ 小町）
1-2 後撰 684、3-5 小町 36、10-177 定家八 1359、▽［わびしき時は］10-212 源氏注 1879

（877：ひ 16）日暮しの なく夕くれそ うかりける いつもつきせぬ おもひなれとも
1-8 新古今 369、2-10 続詞花 242、3-69 長能 39、5-223 時代不 259

（878：ひ 17）ひとりねや いとゝさひしき さほ鹿の あさふすをのゝ くすのうら風
1-8 新古今 450、3-98 顕綱 103

（879：ひ 18）久かたの 雲ゐに見えし 伊駒山 春はかすみの ふもとなりけり（月清抄 / 後京極）
1-9 新勅撰 1278、3-130 月清 202、5-178 後京極 14、6-27 六華集 88、10-181 歌枕名 3358、▽［雲まに見えし］10-185 三百六 28

（880：ひ 19）日にそへて 霞はれ行 冨士のねは けふりそ春の 名残なるへき（拾玉抄 / 慈圓）
3-131 拾玉 520

（881：ひ 20）ひさかたの 光のとかに 桜はな ちらてそ匂ふ 春の山かせ（壬二抄 / 家隆）
3-132 壬二 515、1-13 新後撰 80、5-197 千五百 446

（882：ひ 21）ひとりきく 心のそこを しらせはや つゐにとおもふ 山ほとゝきす（拾玉抄 / 慈圓）
未詳（→「解題」参照）

（883：ひ 22）ひとりねの 夜さむになれる 月みれは 時しもあれや 衣うつこゑ（月清抄 / 後京極）
3-130 月清 92、1-9 新勅撰 328、2-13 玄玉 190、5-178 後京極 76、6-31 題林愚 3885

（884：ひ 23）人ことに 物おもふ色の 空にみつ おもひや秋の かせとなるらん（拾玉抄 / 慈圓）
▽［にほひや秋の］3-131 拾玉 4818

（885：ひ 24）ひとりぬる 山鳥の尾の したりおの 霜おきまよふ 床の月かけ（新古今 / 定家）
6-27 六華集 1012、▽［しだりをに］1-8 新古今 487 、3-133 拾遺愚 1051、5-197 千五百 1509、5-216 定家合 59、5-223 時代不 62、10-177 定家八 437

（886：ひ 25）日影まつ 契りそつらき 有明の 月よりさける 朝かほのはな（壬二抄 / 家隆）
3-132 壬二 48

（887：ひ 26）日暮しの なく夕かけの 秋萩に 露をきかわす 大和なてしこ（壬二抄 / 家隆）
3-132 壬二 138

（888：ひ 27）ひきむすふ かりほの廬も 秋暮て 嵐によわき 松むしの聲（拾遺愚抄 / 定家）
3-133 拾遺愚 1347、2-16 夫木 6284

（889：ひ 28）人しれぬ おもひをつねに するかなる ふしの山こそ 我か身なりけれ（古今 /—）
1-1 古今 534、2-4 古六帖 2665、10-181 歌枕名 5104、▽［わが身なりけり］10-180 五代枕 454

（890：ひ 29）一聲は おもひそあへぬ ほとゝきす たそかれときの 雲のまよひに
1-8 新古今 208、6-31 題林愚 1787、10-123 新三撰 201

（891：ひ 30）人しれぬ 我かよひちの せきもりは よひ〳〵毎に うちもねなゝん（伊勢物語 / 業平）
1-1 古今 632、3-6 業平 47、5-415 伊勢語 6、7-2 業平 42、10-177 定家八 1109、10-212 源氏注 770、10-212 源氏注 790、10-212 源氏注 1461

（892：も 1）もとゆひの 霜おきそへて 行秋は つらき物から をしくもある哉（長秋抄 / 俊成）
3-129 長秋 50、1-21 新続古 600、4-30 久安百 850、6-31 題林愚 4800

（893：も 2）紅葉せぬ ときはの山は 吹風の 音にや秋を きゝわたるらん（古今 / 紀吉もち）
1-1 古今 251、1-3 拾遺集 189、2-3 新撰和 12、2-4 古六帖 419、2-4 古六帖 919、5-294 奥儀 139、5-301 古来風 249、6-12 別兼作 426、6-16 和漢兼 852、10-177 定家八 396、10-180 五代枕 62、10-181 歌枕名 1145、▽［ときはの山に］3-5 小町 100、5-329 桐火桶 97、▽［ときはの山を］5-291 俊頼髄 175、▽［いろかへぬ］10-212 源氏注 250

（894：も 3）もみち葉の 散りてつもれる 我宿に

たれをまつ虫 爰ら鳴らん（古今 /―）
1-1 古今 203、▽［ふりてつもれる］［たれ松虫の］10-210 古今注 618

（895：も 4）紅葉ゝの なかれさりせは 龍田川 水の秋をは たれかしらまし（同 / 坂上是則）
1-1 古今 302、2-4 古六帖 4088、3-16 是則 18、5-329 桐火桶 111、10-180 五代枕 1256、10-181 歌枕名 2422

（896：も 5）もろともに 鳴てとゝめよ きりぐす 秋の別は おしくやはあらぬ（同 / 藤原兼茂）
1-1 古今 385

（897：も 6）もゝちとり さへつる春は 物毎に あらたまれとも 我そふり行（古今 / 大江千里）
1-1 古今 28、5-291 俊頼髄 312、5-293 童蒙 722、5-299 袖中抄 350、10-177 定家八 37、10-212 源氏注 52、10-212 源氏注 209、10-212 源氏注 1738、▽［鳴くなる春は］10-196 色葉和 960、▽［われぞふりぬる］5-388 沙石 153、10-212 源氏注 292

（898：も 7）紅葉ゝを 風にまかせて 見るよりも はかなき物は 命なりけり（同 /―）
1-1 古今 859、5-223 時代不 129、6-12 別兼作 557、10-177 定家八 691

（899：も 8）もへ出ても かるゝもおなし 野への草 いつれか秋に あはてはつへき（―/ 岐王）
〔本文注記〕初句「もへ出ても」の「て」に右傍書「る」あり。
▽［もえ出づるも］5-361 平家覚 4、5-362 平家延 7、▽［萌出づるも］［あはで有るべき］5-363 盛衰記 98

（900：も 9）もろこしも 夢に見しかは ちかゝりき おもはぬ中そ はるけかりける（古今 / けんけい法師）
1-1 古今 768、2-4 古六帖 2046、6-27 六華集 1437、10-177 定家八 1432、10-206 歌林良 146

（901：も 10）もろともに おほうち山は 出つれといる方見せぬ いさよひの月（源し /「とうの中将）
5-249 物語合 187、5-421 源氏 70、▽［大内山を］［出でぬれど］［行く方見せず］5-444 無名草 5

（902：も 11）もゝ敷の たもとの数は みしかともわけておもひの 色そ恋しき
▽［わきておもひの］5-416 大和 151、▽［しらねども］［わきておもひの］5-417 平中 148、▽［あまたの袖は］［見えしかど］［わきておもひの］1-10 続後撰 705、▽［ももしきに］［あまたのそでは］［みえしかど］［わきておもひの］2-4 古六帖 2642、▽［ももわきの］［なかにおひ□□］5-374 今昔 155

（903：も 12）百しきや ふるき軒はの しのふにも 猶あまりある むかしなりけり（百人一首 / 順徳ゐん）
5-276 百人首 100、1-10 続後撰 1205、5-235 新時代 78、7-82 紫禁 800、▽［しのぶぐさ］2-15 万代 3097

（904：も 13）もらさはや おもふこゝろは さてのみか えそ山しろの 井てのしからみ（新古今 / 大輔）
▽［おもふ心を］［さてのみは］1-8 新古今 1089、10-124 女房合 77、10-177 定家八 911、▽［おもふこころを］［さのみやは］10-181 歌枕名 855

（905：も 14）百年に ひとゝせたらぬ つくもかみ 我をこふらし おもかけにみゆ（伊勢物語 / 業平）
5-415 伊勢語 114、5-294 奥儀 416、5-299 袖中抄 570、5-302 歌色葉 208、10-196 色葉和 445、▽［おも影にたつ］10-212 源氏注 422、▽［宇治の橋姫］10-210 古今注 415

（906：も 15）ものゝふの やたのゝすゝき うちなひき をしかつまよふ 秋はきにけり
1-10 続後撰 280、▽［をしかつまどふ］6-6 御裳集 335、10-181 歌枕名 7366

（907：も 16）もとつ人 ありて帰りぬ よふことり 猶よひかへせ なかくたのまん
▽［あかでかへりぬ］［ながなたのまむ］2-15 万代 2822 、4-26 堀河百 209、5-302 歌色葉 421

（908：も 17）もろともに 伏見の里の かきつはた こゝろはかりは へたてさらなむ
4-26 堀河百 270、2-16 夫木 1986、10-181 歌枕名 1109

（909：も 18）もしほ草 しきつの浦の ね覚には 時雨にのみや 袖はぬれけり
▽［袖はぬれける］1-7 千載 526、3-116 林葉 579、5-160 住吉嘉 95、5-272 中古六 191、10-181 歌枕名 3988、▽［袖はぬるらん］5-223 時代不 136

（910：も 19）もしほ草 かくともつきし 君か代の かすによみをく わかのうら波
1-8 新古今 741、5-235 新時代 246、5-399 家長記 9、10-123 新三撰 339、10-181 歌枕名 8314

（911：も 20）もろこしも 天の下にそ ありときく てる日のもとを わすれさらなん
1-8 新古今 871、▽［この日のもとは］3-92 成尋母 7

（912：も 21）もろともに 出し空こそ わすられね みやこの山の ありあけの月（新古今 / 摂政太政大臣）
〔本文注記〕第三句「わすらね」の「ら」と「ね」の間に挿入記号、右傍書「れ」あり。
1-8 新古今 936、3-130 月清 565、3-131 拾玉 1836、▽［都の山に］5-178 後京極 163

（913：も 22）もろともに あわれとおもへ 山桜花より外に しる人もなし（百人一首 / 大僧正行尊）
5-276 百人首 66、1-5 金葉二 521、1-5' 金葉三 512、5-223 時代不 274、5-275 百人秀 71、5-356 今鏡 103、10-178 八代秀 49、▽［しる人はなし］10-177 定家八 1511、▽［しれる人なし］3-107 行尊 109

（914：も 23）諸友に あわれといわすは 人しれぬ とわすかたりを 我のみやせん
1-8 新古今 1000、3-54 西宮左 6

（915：も 24）もらすなよ 雲ゐる峯の はつ時雨 木の葉は下に 色かわるとも（新古今 / 後京極）
1-8 新古今 1087、3-130 月清 351、5-175 六百番 613、5-178 後京極 117、5-223 時代不 46、5-278 自讃歌 171、5-307 近代秀 69、5-308 詠歌大 80、6-31 題林愚 6230、10-177 定家八 836

（916：も 25）もしほやく あまの磯やの 夕けふり たつ名もくるし おもひたえなて（同 / 秀能）
1-8 新古今 1116、5-277 定十体 28、6-31 題林愚 7312、7-81 如願 586、▽［たつ名もつらし］5-223 時代不 198、▽［おもひたえなむ］5-273 続歌仙 98、▽［おもひきえなで］5-278 自讃歌 156、10-123 新三撰 357、10-177 定家八 929

（917：も 26）紅葉ゝの 色にまかせて ときは木も かせにうつろふ 秋の山かな
1-8 新古今 536、4-41 御五十 180

（918：も 27）もゝ敷に かはらぬ物は 梅花 おりてかさせる 匂ひなりけり（新古今 /—）
1-8 新古今 1444、3-20 公忠 1

（919：も 28）紅葉ゝを さこそ嵐の はらふらめ この山もとも 雨とふるなり
1-8 新古今 543、10-177 定家八 472

（920：も 29）百とせの 秋のあらしは すくしきぬ いつれの暮の 露ときえなん（新古今 / 安法々し）
1-8 新古今 1570、3-46 安法 105

（921：も 30）武の やそうち河の あしろ木に いさよふ波の ゆくゑしらすも
1-8 新古今 1650、2-1 万葉 266、2-16 夫木 6692、5-294 奥儀 367、5-295 袋草紙 819、5-298 人麻勘 48、5-299 袖中抄 938、5-302 歌色葉 136、5-306 西行談 45、10-177 定家八 1648、10-180 五代枕 1144、10-181 歌枕名 295、10-196 色葉和 8、10-196 色葉和 965、10-206 歌林良 297、10-212 源氏注 1141、▽［よるべしらずも］2-4 古六帖 1645、3-1 人丸 21、5-299 袖中抄 958、▽［ただよふなみの］2-3 新撰和 301、5-267 三十六 10、5-293 童蒙 443、▽［ただよふ浪の］［よるべ知らずも］5-301 古来風 37

（922：せ 1）瀬をはやみ 岩にせかるゝ 瀧河の われても末に あわんとそ思ふ（百人一首 / 崇徳院御哥）
5-276 百人首 77、1-6 詞花 229、5-223 時代不 154、5-275 百人秀 77、5-301 古来風 554、5-308 詠歌大 87、10-177 定家八 933、10-178 八代秀 55、10-206 歌林良 363、10-211 伊勢注 366、2-9 後葉 552 谷河の 、▽［われてすゑにも］5-277 定十体 254、▽［ゆきなやみ］［谷川の］［われてすゑにも］4-30 久安百 76

（923：せ2）せきかえす 袖に涙や あまるらん 人も木すゑに 秋そ見えぬる（月清抄 / 後京極）
▽［そでにしぐれや］3-130 月清 774、▽［袖に時雨や］4-31 正治初 478

（924：せ3）瀬をせけは ふちとなりても よとみけり 別をとむる しからみそなき（古今 / 忠峯）
1-1 古今 836、2-4 古六帖 1638、3-13 忠岑 174、5-301 古来風 283、7-6 忠岑 65、10-177 定家八 645

（925：せ4）せめておもふ 今一度の あふ事は わたらん川や 契りなるらん（拾遺愚抄 / 定家）
▽［契なるべき］3-134 拾員外 246、5-216 定家合 143、5-225 両卿撰 85、▽［わたらん河の］［契りなるべき］10-212 源氏注 1509

（926：せ5）せきかへし 猶もる袖の 涙かな しのふもよその こゝろならぬに
1-11 続古今 1016、5-197 千五百 2299、5-278 自讃歌 58、6-10 秋風集 698、10-123 新三撰 186

（927：せ6）せきやとふ 松の下道 わくらはに あふ坂まてか しけきなけきは（源し / 源し）
未詳（→「解題」参照）

（928：せ7）蝉のこゑ きけはかなしな 夏ころも うすくや人の ならんとおもへは（古今 / 友則）
1-1 古今 715、2-2 新撰万 43、2-3 新撰和 153、2-8 新撰朗 182、3-11 友則 34、5-4 寛平后 41、5-296 和歌初 120、10-177 定家八 1259、▽［ならんとすらん］2-4 古六帖 3973

（929：―）花ににぬ 身のうき雲の いかなれや 春をはよそに 御吉野の山（→「解題」参照）
3-130 月清 609

（930：す1）すみそめの 君かたもとは 雲なれや たえす涙の 雨とのみふる
1-1 古今 843、2-4 古六帖 2477、3-13 忠岑 163、10-212 源氏注 890、▽［きみがころもは］［あめとふるらん］7-6 忠岑 74

（931：す2）すゝむしの 聲のかきりを つくしても 長き夜あかす ふる涙かな（源じ /―）
5-421 源氏 3、5-249 物語合 301、10-206 歌林良 82、▽［むすむしの］5-250 風葉 299

（932：す3）すまの塩の しほやく煙 風をいたみ おもはぬかたに たなひきにけり（伊勢物語 / 業平）
1-1 古今 708、5-311 八雲 6、5-321 代集 11、5-415 伊勢語 193、10-177 定家八 1320、10-181 歌枕名 4242、10-212 源氏注 210、10-212 源氏注 654、10-212 源氏注 1714、▽［いせのあまの］2-4 古六帖 789、2-4 古六帖 1783

（933：す4）過にしも けふにかるゝも ふた道に ゆきかたしらぬ 秋の暮かな
▽［けふ別るるも］［行く方知らぬ］5-421 源氏 44

（934：す5）するかなる うつの山邊の うつゝにも 夢にも人に あはぬなりけり（伊勢物語 / 業平）
1-8 新古今 904、5-300 六陳状 128、5-374 今昔 83、5-415 伊勢語 11、10-177 定家八 797、10-181 歌枕名 5225

（935：す6）すむ里は 忍ふの森の ほとゝきす 木のした聲そ しるへなりける
1-9 新勅撰 144、10-181 歌枕名 6954、▽［しのぶの山の］5-1 民部合 7

（936：す7）すたきけん むかしの人も なき宿に たゝかけするは 秋の夜の月
1-4 後拾遺 253、2-8 新撰朗 497、3-56 恵慶 80、5-293 童蒙 33、5-294 奥儀 366、5-302 歌色葉 135、10-196 色葉和 994、▽［なき宿も］5-270 後六々 27、▽［なきあとに］5-292 綺語抄 595、▽［あり明の月］10-206 歌林良 657

（937：す8）住のえに 生そふ松の 枝毎に 君か千とせの かすそこもれる（新古今 / 隆國）
1-8 新古今 725、5-80 皇春秋 20、5-354 栄花 553、7-32 伊大輔 75、▽［おふてふ松の］10-181 歌枕名 3880

（938：す9）すみの江の きしによる波 夜るさへや 夢のかよひち 人めよくらん（―/ 敏行）
1-1 古今 559、5-275 百人秀 11、5-276 百人首 18、10-177 定家八 1218、10-180 五代枕 943、10-181 歌枕名 3863、▽［すみよしの］2-4 古六帖 2033、5-4 寛平后 186、5-307 近代秀 93、10-180 五代枕 1650

（939：す 10）すみそめの ころもうき世の 花さかり 折わすれても おりてけるかな（新古今 / 実方）
1-8 新古今 760、3-61 道信 25、3-67 実方 26、5-223 時代不 265、5-277 定十体 96、5-328 三五記 55、5-354 栄花 12、5-381 世継語 38、10-177 定家八 655、▽［ころもうきよに］［はなざくら］7-20 実方 76

（940：す 11）すみそめの 袖は空にも かさなくに しほりもあへす 露そこほるゝ（同 / 具平親王）
1-8 新古今 855

（941：す 12）すゝしさは いきの松はら まさるとも そふるあふきの 風なわすれそ（同 / 枇杷皇太后宮）
1-8 新古今 868、2-10 続詞花 676、5-354 栄花 119、5-356 今鏡 43、10-181 歌枕名 9019、▽［かぜにわすれば］10-212 源氏注 588

（942：す 13）凉しやと 草むら毎に たちよれは あつさそまさる とこなつの花
2-4 古六帖 3631、2-6 和漢朗 165

（943：す 14）すまの塩の 波かけ衣 よそにのみ 聞はわか身に 成にけるかな（—/ 道信）
1-8 新古今 1041、10-177 定家八 901、10-181 歌枕名 4246、▽［見しはわが身に］［なりぬべきかな］3-61 道信 90

（944：す 15）過にけく 世ゝのちきりも 忘られて いとふうき身の はてそかなしき
▽［すぎにける］［はてぞはかなき］1-8 新古今 1393

（945：す 16）すまの塩の 袖にふきこす しほ風の なるとはすれと 手にもたまらす（新古今 / 定家）
〔本文注記〕第二句「袖こす波の」の「こす波の」見セ消チ。右傍書「にふきこす」あり。
1-8 新古今 1117、3-133 拾遺愚 288、5-216 定家合 159、10-177 定家八 1198、10-181 歌枕名 4247、▽［しほ風に］6-31 題林愚 7248

（946：す 17）住よしの 恋わすれ草 たねたえて なき世にあえる 我そかなしき（同 / 元真）
1-8 新古今 1420、10-177 定家八 1130、10-181 歌枕名 3815、▽［こひわすれがひ］［われぞわびしき］3-28 元真 309

（947：す 18）過にけり しのたの森の ほとゝきす たえぬしつくを 袖にのこして
1-8 新古今 213、5-273 続歌仙 50、10-181 歌枕名 3473、▽［すぎぬなり］5-197 千五百 742

（948：す 19）すゝしさは 秋や帰りて はつせ河 ふるかは野への 枚の下かけ
1-8 新古今 261、6-31 題林愚 2818、10-181 歌枕名 2869

（949：す 20）すへらきの 木たかきかけに かくれても 猶春雨に ぬれんとそおもふ
1-8 新古今 1479、6-31 題林愚 807

（950：す 21）すかはらや ふし見の暮の さひしきに たえす里をもふ ほとゝきすかな（月清抄 / 夏後京極）
▽［たえずまどとふ］3-130 月清 624

（951：す 22）住吉の 夜のほたるの あわれさを なをおもはする 松のかせかな
▽［すみのえの］3-131 拾玉 1569、▽［住のえの］［松風のこゑ］2-16 夫木 3238

（952：す 23）すみそめの 袖はよそなる 花の色を 人のためにも 猶おしむかな（長秋抄 / 俊成）
10-6 俊五社 421

（953：す 24）すまの浦の とま屋もしらぬ 夕霧に たえ〳〵てらす 塩のいさり火（月清抄 / 後京極）
1-10 続後撰 319、3-131 拾玉 1776、10-181 歌枕名 4280、▽［すまのあまの］3-130 月清 535

（954：す 25）住よしの 松のしつ枝を あらふ波 こほらぬ聲そ いとゝさむけき（同 / 同）
▽［こほらぬうへぞ］3-130 月清 668

（955：す 26）すまの塩の まとをの衣 夜やさむき 浦風なから 月もたまらす（壬二抄 / 家隆）
3-132 壬二 2391、1-9 新勅撰 272、5-217 家隆合 63、5-273 続歌仙 36、6-27 六華集 778、10-123 新三撰 270、▽［よる寒み］10-185 三百六 245

（956：す 27）すまの浦の あまりももゆる おもひ

かな しほやくけふり 人はなひかて（拾遺愚抄 / 定家）
▽［あまりにもゆる］1-13 新後撰 926、3-133 拾遺愚 68、6-31 題林愚 7558、▽［あまりにもゆる］［しほやきごろも］10-181 歌枕名 4296

（957：す 28）住よしの 神やまことに 言の葉を 君につたへし 松かせの聲（月清抄 / 後京極）
〔本文注記〕第三句「君につかへし」の「か」見セ消チ。右傍書「た」あり。
3-130 月清 1555

（958：す 29）すみなれし すみかもつねの すみかゝは たひはたひとも 何おもふらん（長秋抄 / 俊成）
4-30 久安百 898、▽［旅をたびとも］3-129 長秋 95

（959：す 30）すみわひぬ 今はかきりと 山里に 身をかくすへき 宿もとめてん（伊勢物語 / 業平）
5-415 伊勢語 107、10-206 歌林良 29、10-209 僻案抄 22、▽［今はかぎりの］10-212 源氏注 1155、▽［つまぎこるべき］1-2 後撰 1083、3-6 業平 78、5-301 古来風 334、10-177 定家八 1695、10-206 歌林良 28、▽［いまはかぎりぞ］［つま木こるべき］2-4 古六帖 984、7-2 業平 9

3. 解題

本稿で採り上げた 128 首の歌のうち、見セ消チや挿入記号、傍書などの注記は 7 首の歌に見出される。

このうち、当該面の最初の 1 行を見落としてしまい、最終行に書き足したことを示す「●」印が、（862：ひ 1）に見出された。これは、（467：む 26）（592：ま 11）（682：あ 1）（692：あ 11）に付されていた「○」印と同様の指示を示すものであろう。いずれの場合も、親本の喉（綴じ目）が開きにくかったことによるものと推察される。

なお、本書は通常、半丁 10 行書きで 5 首の歌を記すが、「せ」の歌群の九十四丁表では、4 行 2 首の歌の後、5 行程度の空白を置いて、最終行に（929：—）の歌を 1 行書きにする。この空白は、親本の汚れ、あるいは破損によるものか。また、最終行の（929：—）は、「は」で始まる歌であり、「せ」の歌群に記されるのは不審である。この歌が親本でも 1 行書きにされていたとすれば、本書に本行として記されていた歌とは考えにくい。あるいは、「は」歌群の歌として切り紙に記され、該当箇所に貼られていた歌が剥がれ、親本のこの箇所に挟まれていたものを、そのまま書写したものか。

見セ消チは 3 首の歌にある。（853：し 22）は見セ消チが単独で用いられ、残りの（945：す 16）（957：す 28）は、右傍書を伴う。いずれも訂正後の本文が、他出歌集の本文に一致する。

また、和歌本文の傍書は、先の（945：す 16）（957：す 28）の他、3 首の歌に見られる。（848：し 17）には「……イ」「イ……」という形式で 1 箇所ずつ、計 2 箇所の異文傍書がある。いずれの異文も出典は未詳であるが、第二句の「何そもイ」は、当該歌と同じ『新古今集』にも載る、『伊勢物語』第六段の「白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへてけなましものを」（新古今集・哀傷・851・業平朝臣・題しらず）の第二句に引かれた可能性はあろう。残りの（899：も 8）（912：も 21）は、傍書が他出本文と一致する。

『新編国歌大観』に他出が唯一である歌は、次のとおりである。

1-1 古今	1 首
1-8 新古今	2 首
3-130 月清	4 首
3-131 拾玉	4 首
3-132 壬二	3 首
5-367 太平記	1 首
5-421 源氏	2 首
10-6 俊五社	1 首

『秋篠月清集』『拾玉集』『壬二集』の六花集の他、『源氏物語』『太平記』といった作品にも目配りしている点は、これまでの考察結果と軌を一にする。

なお、10-6 俊五社の唯一例、（952：す 23）は、「長秋抄」の集付をもつ。この歌は、『俊成五社百首』中の「日吉社百首和歌」の 1 首であり、『新編国歌大観』所収の『長秋詠草』〔国立国会図書館蔵長秋詠藻（五—二・三—七）。応永 30 年（1423）6 月書写奥書。〕には見出せない。だが、彰考館文庫蔵本『続長秋詠藻』〔寛永 13 年（1636）10 月書写奥書。古典文庫 第 150 冊『異本長秋詠藻』（松澤智里校、吉田幸一編・発行、昭和 35 年 1 月）所収。〕には、「五社百首」が収められており、当該歌を見出すことができる（同書 143 頁、202 番）。

次に、集付は全部で 91 箇所に見出される。

「新古今」　21 箇所
「古今」　16 箇所
「伊勢物語」　13 箇所
（うち「古今にも」と並記する箇所 1 箇所）
「月清抄」　9 箇所
「壬二抄」　7 箇所
「百人一首」　6 箇所
「拾遺愚抄」　5 箇所
「拾玉抄」　4 箇所
「長秋抄」　4 箇所
「源し」　3 箇所
「山家抄」　2 箇所
（うち「千載にも」と並記する箇所 1 箇所）
「千載」　1 箇所

これまでにも指摘してきたとおり、「新古今」「古今」「伊勢物語」と六花集、「百人一首」の集付が目立つ。

ただし、上記の「伊勢物語　古今にも」（840：し 9）とする歌は、『古今集』にはなく、『新古今集』に収められる。また、集付を「壬二抄」とする（859：し 28）は、実は『壬二集』にはなく、『秋篠月清集』に見出され、後の『六華集』でも、作者は後京極（良経）とある。さらに、（925：せ 4）の歌は、『拾遺愚草員外』の歌だが、集付は「拾遺愚抄」とされている点にも留意したい。

なお、「源し」の集付のある 3 首の歌のうち、（927：せ 6）は、『源氏物語』そのものには見出すことができない。しかしながら、室町時代の連歌師であったという比丘尼、祐倫が著したとされる『源氏物語』の梗概書『山頂湖面抄』〔文安六年（1446）成〕には、当該歌が収められる〔今井源衛氏・古野優子氏編著、祐倫著、源語梗概・注釈書『山頂湖面抄諸本集成』（笠間書院、平成 11 年 7 月）106 頁。〕。この例は、『山頂湖面抄』の流布状況を示す例としてのみならず、『山頂湖面抄』の著者とされる祐倫が連歌師だったという点から、本書の成立に重要な示唆を与えるものであろう。

また、「拾玉抄」の集付のある（882：ひ 21）も、『新編国歌大観』の範囲内では、他出を見出すことができない。だが、『新編国歌大観』所収の『拾玉集』は、青蓮院本を底本としており、貞和二年（1346）成立の最善本〔『新編国歌大観』拾玉集（慈円）解題（石原清志氏）〕とされるが、二群の百首が欠落しているという〔『校本 拾玉集』（多賀宗隼氏編著、吉川弘文館、昭和 46 年 3 月〕。その欠落部分に、当該歌は見出されるのである（『校本 拾玉集』二〇二三番）。つまり、青蓮院本の欠落部分を有する伝本が本書の撰歌材料であったということになろう。

さて、作者名は 89 箇所に記されているが、若干の誤りも存する。（846：し 15）で「俊成」とする作者名は、「（皇太后宮大夫）俊成女」の誤りである。また、（897：も 6）　には、「大江千里」とあるが、集付の『古今集』では「よみ人しらず」である。次の（897：も 7）の歌には、作者名は記されないが、やはり集付は前歌と同じ『古今集』で、これによれば、作者は「大江千里」である。おそらく目移りによって、この作者名を直前の歌に誤って記してしまったのであろう。本書に親本が存在したことを窺わせる例である。

なお、良経の『新古今集』歌を、『新古今集』の作者表記そのままに「摂政太政大臣」（912：も 21）とする箇所もあれば、「後京極」（915：も 24）とする箇所もある。この点については、必ずしも統一されていないようである。

ところで、『伊勢物語』の歌の作者については、これまでも、古注釈との関連を考察してきたが、本稿においても、（843：し 12）『伊勢物語』第九十九段の歌の作者について、注目すべきことが存する。すなわち、この歌は、『伊勢物語』では、「中将なりける男」の「見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ」（一七四）という歌に対する「女」の返歌ということになっている。『古今集』では読み人知らず、『定家八代抄』『歌林良材』もこれを踏襲し、『和歌童蒙抄』や『今昔物語集』「巻二十四　業平於右近馬場見女読和歌語第卅六」『十訓抄』「第一可施人恵事」も「女」の歌として、それが誰かは特定しない。本書のように「染との」、すなわち「染殿内侍」とするのは、『冷泉家流伊勢物語抄』（片桐洋一氏『伊勢物語の研究〔資料篇〕』〈昭和 44 年 1 月、明治書院〉所収。）の他、『十巻本伊勢物語注』『増纂伊勢物語抄』『伊勢物語奥秘書』（以上、片桐洋一氏・山本登朗氏責任編集『伊勢物語古注釈大成』第一巻〈2004 年 10 月、笠間書院〉所収。）である。『伊勢物語宗長聞書』（前掲『伊勢物語の研究〔資料篇〕』所収）は、「女は誰ともなし。」としつつ、「染殿トモ、

斎宮トモ」と傍書する。その一方で、島原文庫本『和歌知顕集』は、「車にのりたるおんなは、大なごんげんしやうきやう（源昇卿）のむすめ、てう（寵）なり。」（同）、『彰考館文庫本伊勢物語抄』（同）は「高子」とする。このように、「染との」とは別の人物を示す注釈書も存する中で、本書が、冷泉家流の『伊勢物語』注釈書の流れを汲む説を記しているということは、前稿までの指摘とあわせて、特記すべきであろう。

以上で、本書収載歌の他出調査および考察を一通り終えることになる。これまでとくに触れなかったが、六家集の集付について、「長秋抄」「山家抄」「拾遺愚抄」「月清抄」「壬二抄」「拾玉抄」というように「……抄」と記すのは、おそらく、『六家集』に先立って撰ばれたという、牡丹花肖柏『六家抄』との関連が否定できまい。また、本書編纂の目的については、歌鎖・文字鎖の類の言葉遊びの手引き書としての一面も想定し得るであろう。本書全体を通して見た撰歌対象とその範囲とともに、詳細については別稿を期す。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における2015年度秋学期の授業「日本古典文学情報特論2」の内容の一部であり、また、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、いずれも平成28～30年度）における研究の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器“e-CSA Ver.2.00”を使用した。

また、岩坪健氏には、『山頂湖面抄』に関するご教示を賜った。ここに御礼申し上げる。